おとうさんの伝記

野口すみ子 作　おぼまこと 絵

著者　**野口すみ子**

1940年、東京に生まれる。疎開先の青森県で終戦をむかえる。会社員、専業主婦をへて、現在は東京都の小学校の教員。児童文学同人誌「牛」に所属し、創作活動を続けている。

現住所＝東京都日野市西平山5－13－11

画家　**おぼまこと**

1937年、台湾に生まれる。1970年ごろから子どもの本の世界に入り、現在にいたる。1977年、第2回現代童画会大賞受賞。主な作品に「王さまのやくそく」「おやまのでんしゃ」「おうさまのみみはロバのみみ」「ふしぎなサーカス」「とうげのおんぼろバス」「ノウサギの歌」など多数ある。

現住所＝東京都国立市東2－22－6

おとうさんの伝記《文研子どもランド》

著者　野口すみ子　発行者　佐藤武雄

基本カード記載例

N.D.C.913　野口すみ子
おとうさんの伝記
文研出版 1985　112p　23cm　文研子どもランド

発行所　**文研出版**　東京都文京区向丘2－3－10　大阪市天王寺区大道4－3－25

印刷所　寿印刷株式会社

© S. Noguchi 1985

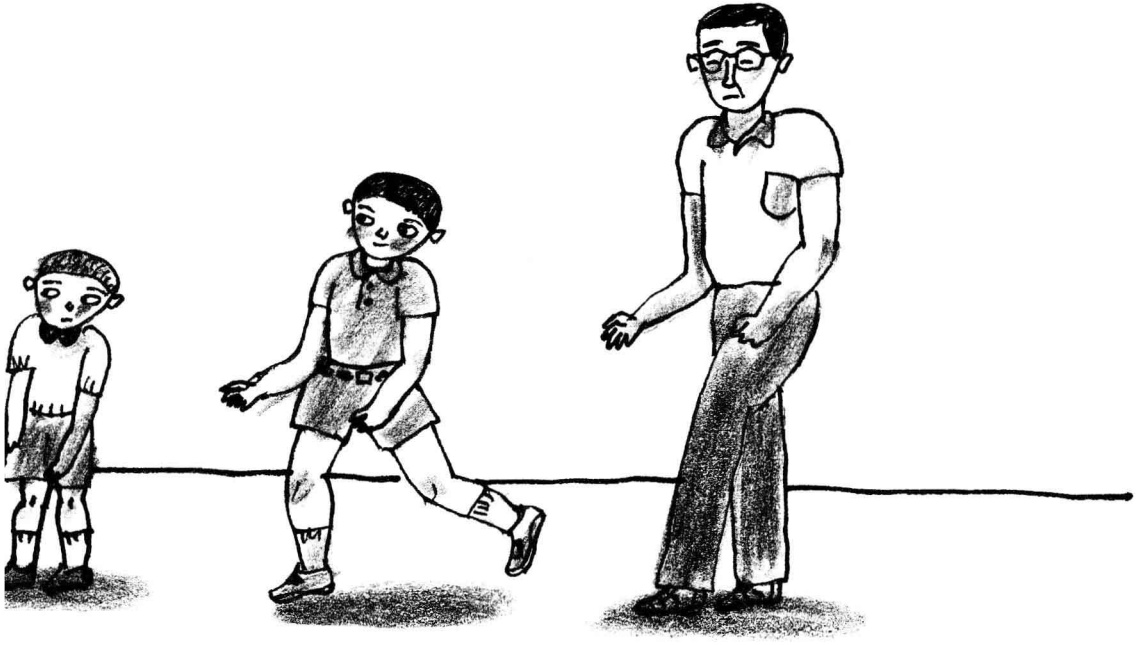
おとうさんの伝記

野口すみ子 作
おぼまこと 絵

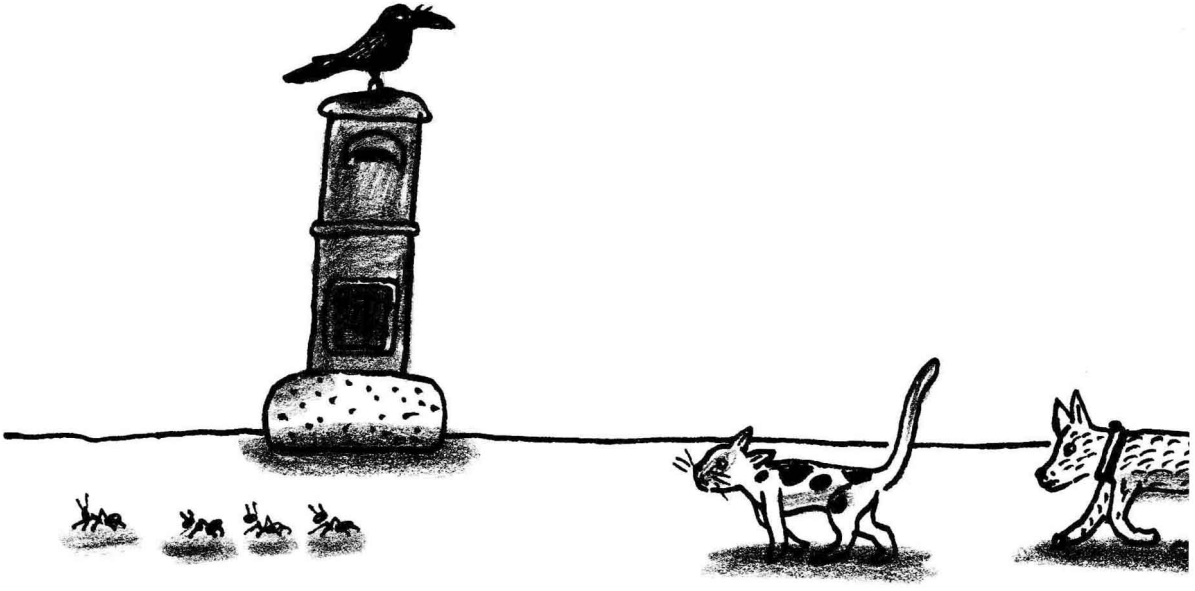
文研出版

もくじ

ショウブ湯 …… 6
日曜参観 …… 16
カキの木 …… 25
夏休みの自由研究 …… 36
縁日 …… 45
山 …… 53



ひとり旅 —— 59
二人の西郷さん —— 70
氷水 —— 79
ふとんのなか —— 85
おとうさんとおかあさんのであい —— 93
学校で —— 105



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おとうさんの伝記

「世界じゅうでいちばんすきな人はだれか。」
って聞いてくれないかな。そしたら、ぼくはまよわず〝おとうさん〟て答えちゃう。ぼくのおとうさんは、みんなのおとうさんより、ちょっと年をとっているけど、そんなのちっとも気にならない。やさしくって、ゆかいで、勇気のある人なんだ。

ショウブ湯

ぼくも、弟の久も、おとうさんもおふろが大すきなんだ。いつも三人いっしょにおふろにはいってあそんでいる。

おかあさんが、

「まだはいっているの。もう一時間ですよ。」

なんていって、ときどき、おふろの戸をあけてなかをのぞくこともあるけれど、それでもあがらないときなんてざらで、長いときなんか二時間もはいってあそんでいるんだ。石けんをからだいっぱいにぬって、あわ人間になったり、おならをタオルでつかまえたりしていると、すぐ時間がたってしまう。

子どもの日のことだった。

夕食をちょっとすてきなレストランで食べるというので、ぼくはとても楽しみにして

いた。

おかあさんのつくる料理は、レストランに負けないくらいおいしい。でも、レストランは、食器とか、じゅうたんとか、電灯がしゃれていて、うちで食べるより、デラックスなふんい気だ。

それにおかあさんは、レストランで食べるのがとりわけすきだ。ちょっと食べてみて、「このハンバーグソースは、トマトピューレーにウスターソース、コショウに塩、ベイリーフにニンニク、あとはなにがはいっているのかしら。」

なんて目をぱちぱちさせたり首をかしげて、料理の研究をする。つぎのとき、きまってそのレストランによくにた味をつくりだして、

「どう、このまえのハンバーグソースの味ににてない？」

なんていってだしてくれる。その味が、レストランのものよりおいしくできていることが多い。

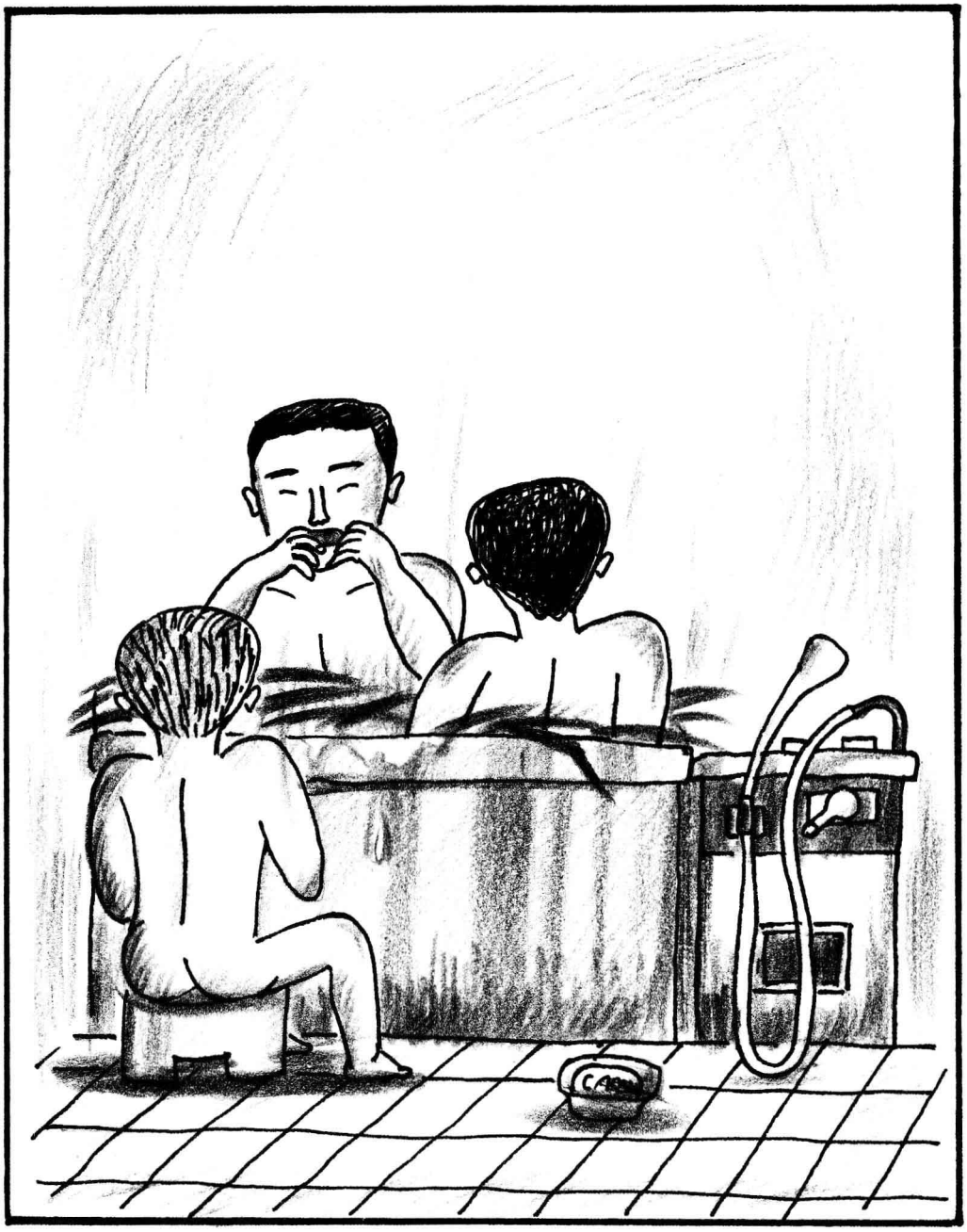
こんなわけで、子どもの日とか、ぼくや弟のお誕生日とか、おとうさんとおかあさんの結婚記念日には、ちょっとすてきなレストランに食べにいく。

おふろにはいって、あかをおとして、それからレストランにいこうということになった。おとうさんとぼくと久の三人で、三時ごろからおふろにはいってあそんでいると、おかあさんが戸をあけて、にこっと笑って、

「きょうは子どもの日、ショウブ湯よ。」
といって、どさっと、青いとんがった葉っぱを湯ぶねに投げこんでくれた。
「うわあ、ショウブだ、ショウブだ。」
ぼくや久より、おとうさんが大喜びをした。
いままで子どもの日でも、ショウブ湯にしたことがなかった。だから、ぼくと久は、ショウブ湯というのを知らなかった。
「ほら、いいにおいだよ。子どもの日にはね、このショウブを、おふろにいれるんだよ。昔っから。」
といって、おとうさんはにおいをかいだ。ぼくも久も、おとうさんのまねをして、においをかいでみた。青くさいけれど、よいにおいが、鼻にとびこんできた。
「くさいや、ショウブって、くさいねえ。」
久が大きな声をだした。
「くさいんじゃないよ。いいかおり、いいにおいというんだよ。このショウブをいれるとね、からだがよくあたたまるよ。いまにぽかぽかしてくるから。」
といったあと、
「おかあさん、高かっただろ。」
とわざわざ戸をあけていった。
「ううん、そうでもないのよ。百五十円だから。虫くいだから特に安かったの。特売よ。」

といって、またにこっと笑った。
いわれてよくみると、ところどころ虫がくったのだろう、あながあいていた。
おかあさんは、特売が大すきなんだけれど、ショウブまで特価品を買ってくるなんて、さすがだ。
「いいこと教えてあげようか。」
おとうさんは、こんなとき、目を細めてやさしい顔をする。
「教えて、教えて。」
ぼくと久は、おとうさんにせがんだ。
「ショウブが笛になるんだよ。」
そういって、おとうさんは草笛を鳴らしてみせてくれた。
「かして、やらせて、やらせて。」
といって、もらったけれど、草笛は、おとうさんだとよく鳴るのに、ぼくと久がふいても鳴らなかった。
「かんじゃだめだ。つばきをだしてもだめだよ。やさしく、やさしく。ここがゆれなきゃ鳴らないよ。」
といって、ショウブの葉のなかほどをおさえた。なんどもこつを教えてもらって、やっと音がでるようになった。
「笛は、水につけると、もっとすてきな音色になるよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



おとうさんがいうように、ショウブの笛は、水をふくませると、音色がかわるようになった。

「おかあさん、おかあさん。聞いて、聞いて。ショウブの笛のコンサートだよ。」

おとうさんは、また戸をあけておかあさんをよんだ。

「はい、はい。」

おかあさんは、めんどくさがらずにきてくれた。どんなことだって、ぼくのおかあさんは、めんどくさがらないんだ。

こうして、はだかのコンサートがはじまった。

演奏者は、すっぱだかの三人で、湯ぶねから顔をだして、ショウブをくわえていた。お客さんは、戸口にしいてあるバスマットに腰をおろしたおかあさんただひとり。水をふくんだショウブは、ロウロウと鳴った。ときどき音がかわって、高くなったり、低くなったりするところがすてきだ。

「まあ、すてき、すてき。雅楽（日本に古くからある音楽。）の笙（雅楽に用いる管楽器。）のような音がするのねえ。」

おかあさんは、もんくなくほめてくれた。

「あとで、おかあさんもやってみるから、残しておいてね。」

といって、おかあさんはいってしまった。

「おとうさん、どこでおぼえたの？」

久が聞いた。おとうさんは、ちょっとショウブから口をはなして、考えているようにみえたけど、それには答えなかった。
「ねえ、おとうさんたら、どこでおぼえたの。」
久がおとうさんの肩をゆすったら、おとうさんは、
「銭湯だよ。」
といった。
「どこのおふろ屋さんなの。」
と、ぼくが聞き、久が、
「だれに教わったの？」
と聞いたら、返事をしないんだ。
学校で、ぼくのとなりにすわっているチコちゃんをからかいすぎちゃうと、返事をしてくれないときがあるけれど、おとうさんが返事をしてくれないなんてめずらしい。
ぼくと久で、なんどもおとうさんのからだをゆすって、くりかえしたずねたら、
「いま、いっしょうけんめいに、そのことを考えているところだよ。」
といって、へんにまじめな顔をしていた。
ショウブの草笛にあきたぼくと久は、それから湯ぶねをでて、石けんをぶくぶくさせて、ほっぺたやら胸につけて、ひげだのむな毛だのといってあそんでいた。
すっかりむちゅうになり、あわだらけであそんでいたら、〝バッシャン〟って、大きな

水音がしたんで、おどろいておとうさんをみたら、たいへんなんだ。だれだってどうてんすると思うよ。

おとうさんが、いっぱいうかんだショウブのあいだに顔をつっこんでいるんだよ。おそろしかったよ。こわかったよ。

「おとうさん、おとうさん。おかあさん、おかあさん。」

そうさけびながら、いそいで顔をもちあげた。そして、あごを湯ぶねのふちにのせてあげた。おとうさんは、苦しそうにふうふういっていた。

ぼくたちがいなかったら、おとうさん、きっとおぼれていたよ。

おかあさんがきて、はだかのおとうさんをひっぱりあげた。ふらふら、ふにゃふにゃしていて、しっかり歩けなかった。それからふとんをしくやら、医者をよぶやら、たいへんだった。

ぼくも久もまっぱだかで大かつやくをした。もちろん、おとうさんもまっぱだかだったけれどね。そのへんが水びたしになったけれど、そんなことはどうでもよかった。なにしろおとうさんの一大事だから。

心臓まひか脳卒中かと心配したけれど、けっきょくは、ただの息のだしすぎだった。

お医者さんはおちついて、

「いったいどうしたのですか。倒れたときのことを話してください。」

といったので、

「ショウブの草笛をふいていたのです。ずうっと。」
とおかあさん。そのあとぼくと久で、
「そう、ずうっとずうっと、ショウブの笛をふいていたの。」
とことばをつけたした。
「それでわかった。過呼吸の状態になったのです。炭酸ガスをだしすぎたのです。なんで過呼吸になるまでショウブなんかふいたのでしょう。子どもみたいに。」
お医者さんは、首をかしげて帰っていった。
「子どもの日なのに、お医者さんよくきてくださったわ。」
おかあさんは、ていねいに、お医者さんを送りだしたあとにいった。
二時間ほどすると、おとうさんは、
「もうだいじょうぶ。」
といっておきてきたけれど、元気がなかった。過呼吸の後遺症だと思った。むっつりして、むずかしい顔をしていた。こんな顔は、めったにみられない。
子どもの日は、こんなことであまりいい日とはいえなかった。
楽しみにしていたレストランにも、いけなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com